

唐土たうどに北叟ほくそうといふ翁おきなありけり。かしこく強き馬つゆをなむ持たりける。これを人にも貸し、我も使ひつつ、世をわたるたよりにしけるほどに、この馬、いかがしたりけむ、いづちともなく失せにけり。聞きわたる人、いかばかり嘆くらむと思ひてとぶらひければ、「悔なげいず」とばかり言ひて、つゆも嘆かざりけり。あやしと思ふほどに、この馬、同じさまなる馬をあまた具してきまにけり。いとありがたきことなれば、親しき・疎き、よろこびを言ふ。かかれどまた、「喜よろこはず」と言ひて、これをも驚く気色なし。かくてこの馬あまたを飼ひて、さまざまに使ふ間に、翁が子、今出で来たる馬に乗りて落ちて右の腕をつき折りてけり。聞く人、また驚き問ふを、見れど、なほ「悔いず」と言ひて、気色かはらず。さるほどに、にはかに軍おこりて兵を集められけるに、国の中にさもあるもの、残りなく軍に出でてみな死しにけり。この翁が子、手折れたるによりて、その中にもれにければ、片手は折れたれども、命はまたかりけり。これ、かしこきためしに言ひ伝つたへたり。唐土のことなれども、いささかこれを記せり。

- 【問一】重要語句 二重傍線部①～⑦の、ここでの意味を答えなさい。
- 【問二】漢字の読み 二重傍線部⑤「気色」の読みを、ひらがなで答えなさい。
- 【問三】動詞 波線部(ア)～(ウ)について次の小問に答えなさい。

◆ 動詞の学習法

(先に覚える動詞)
 力変(一語)…来
 才変(二語)…す・おはす
 才変(二語)…死ぬ・去ぬ
 (一往ぬ)
 ラ変(四語)…あり・をり・はべり・いまそがり
 上一段…<実戦ゼミ>本冊7頁参照。
 下一段(一語)…蹴る
 (それ以外の動詞)
 「ず」をつけて判断する。
 四段…「ア」段
 上一段…「イ」段
 下一段…「エ」段
 例 読ま[m]ず 四段

- I <行・活用の種類・終止形>(ア)～(ウ)の行・活用の種類・終止形を答えなさい。
- II <活用形>(ア)～(ウ)の活用形を、それぞれ答えなさい。

【問四】口語訳するための

- I <主語・目的語>(1)「嘆く」・「思ひ」のそれぞれの主語、(2)の主語・目的語を答えなさい。ただし、(2)の目的語は現代語で書き、それ以外は文中の言葉で答えること。
- II <助動詞「らむ」>(1)「らむ」の意味は次のうちのどれか、記号で答えなさい。
 - ア 現在の推量(今ごろ～しているだろう)
 - イ 原因・理由推量(どうして～のだろう)
 - ウ 伝聞・婉曲(～という・～ような)
- III <「つゆ(も)」>「打消」の訳し方 (2)「つゆ(も)」の「打消」の訳し方を答えなさい。
- IV <へ口語訳> I～IIIを踏まえて、(1)・(2)を訳しなさい。

【問五】内容把握

- ア 翁の態度
- イ 「かしこく強き馬」が他の馬を連れてきたこと
- ウ 人々の親切心
- エ 翁の子が兵士からもれたこと

【問六】

- ア 景戒
- イ 橘成季
- ウ 鴨長明
- エ 無住

実戦ゼミ 多義語のこころ

一つの単語に、複数の意味。君ならどうする？ 全ての意味を丸暗記しようとするんじゃないか。だが、そんなやり方では、役に立たないことが多い。では、どうしたらよいか。まず、大もとの意味を押さえること。その上で、語の広がりを理解し、覚える。「かしこし」を例にとろう。古代人は、自然界のあらゆる事物に精霊が宿っていると信じていた。その威力に畏怖する気持ちだが、「かしこし」の本来の意。そこから、畏敬すべき能力などにも使われるようになったのだ。連用形で、「非常に」と訳すこともある。

1 人生いろいろ

〈古今著聞集〉

▼解答

問一 ①非常に ②手段 ③不思議だ ④珍しい ⑤様子
 ⑥やはり ⑦賢明である 問一 けしき

問三 I(ア)ラ行・変格活用(ラ変)・あり (イ)サ行・変格活用(サ変)・す (ウ)ヤ行・上二段・悔ゆ (エ)カ行・変格活用(カ変)・く (オ)マ行・上二段・見る (カ)ナ行・変格活用(ナ変)・死ぬ (キ)ハ行・下二段・伝ふ (ク)サ行・四段・記す II(ア)連用形 (イ)連用形 (ウ)未然形 (エ)連用形 (オ)已然形 (カ)連用形 (キ)連用形 (ク)已然形(もしくは命令形)

問四 I(1)「嘆く」の主語：(北叟といふ)翁 「思ひ」の主語：聞きわたる人 (2)の主語：(北叟といふ)翁 (2)の目的語：馬が逃げてしまったこと IIア III全くない IV(1)「今ごろ、翁はどんなにか嘆いているだろう」と聞いてきた人は思っ (2)翁は、馬が逃げてしまったことを全く嘆かなかった 問五 ア 問六 イ

解法のポイント

問一 ①・⑦かしこし：動詞「畏まる」と関連させて覚える。こちらが畏まらざるを得ないような畏怖・畏敬の念を表す。プラ・マイナス両面に使われるので注意。連用形「かしこく」で「非常に」と訳す場合もある。〈実戦ゼミ〉本冊5頁参照。②たより

未然形接続の助動詞「ず」、(オ)の直後には、已然形接続の助動詞「と」の直後には連用形接続の助動詞「たり」がある。(エ)の直後の「に」は、連用形接続の助動詞「ぬ」だ。「に」が「に」の「に」別冊10頁参照。(ウ)はIの【完了の助動詞】「ら」参照。助動詞の接続については、〈実戦ゼミ〉本冊31・33・35・37頁参照。

問四 I (1)は「聞きわたる人、いかばかり嘆くらむ」と思ひする。のようにカッコを付けてみると、「思ひ」の主語がはっきりする。(1)「嘆く」の主語・(2)の主語・目的語は、何が嘆きの原因かをつかめば解けよう。

II 助動詞「らむ」に関する問題。今回は入門編なので、訳し方もあげておいた。

III 〈実戦ゼミ〉本冊59頁参照。

問五 「これ」は「かしこきためし」である。では、「かしこき」こととは何か。「悔いず」(四行目)・「喜ばず」(六行目)・「悔いず」(八行目)などから、どのような事態が起ころうと一喜一憂しない翁の態度が読み取れよう。

問六 選択肢のア景戒は平安時代の人物、他は鎌倉時代の人物。

【作者名も覚えてほしい説話】
 日本霊異記(景戒)
 発心集(鴨長明)

古今著聞集(橘成季)
 沙石集(無住)

通釈

中国に北叟というおじいさんがいた。非常に力強い馬を持っていた。この馬を人にも貸し、自分でも使っては生計を立てる手段

：「頼り・便り」を当てて覚えよう。ここは、生計を立てるのに、頼りになる「手段」の意。③あやし：奇異で、理解しがたいという気持ち。ここは、「不思議だ」の意。「身分が低い」の意もある。貴族には、「身分が低い」者のことが奇異に感じられるのだ。④「ありがたし」：「有ることが難しい」で、「めったにない」の意。⑤「気色」：ほのかに見える様子。類義語「けはひ」は、視覚以外で何となく感じられる雰囲気。⑥なほ：何があっても変わらず一直線。「直」と結びつけて覚えよう。

問二 中世以降、「きしよく」と読むことが多くなったが、読みが問われたら「けしき」と答える。

問三 I 〈動詞の学習法〉本冊4頁参照。(ア)・(イ)・(ウ)・(オ)・(カ)は(先に覚える動詞)。(ウ)・(キ)・(ク)は(それ以外の動詞)なので、「ず」をつけて判断する。(ウ)を「記せず」と思い、下二段と答えた人へ。「記せ」の下の「り」は、

【完了の助動詞】「り」で、サ変の未然形・四段の已然形(命令形という説もある)につく。

〔接続の覚え方〕

サ—さみしいメリ—
 未—し—い—
 四—已—(命)—「り」

行で間違えやすいのは(ウ)・(オ)だろう。(ウ)はア行かヤ行かでするところ。〈実戦ゼミ〉本冊9頁参照のこと。(オ)はラ行と答えてしまった人もいるのでは？しかし、未然形・連用形が「見」なのでマ行。

II (イ)・(ウ)・(オ)・(カ)は、波線部を見ただけでも判断できる。しかし、わからない場合は、直後の語の接続に注目すること。(ア)・(ウ)・(オ)の直後には、連用形接続の助動詞「けり」、(ウ)の直後には、

にしていたが、この馬はどうしたのだろうか、どこへともなくいなくなってしまった。そのことを聞いてきた人は、「今ごろおじいさんはどんなにか嘆いているだろう」と思って訪ねたところ、おじいさんは「後悔していない」とだけ言って、馬が逃げてしまったことを全く嘆かなかった。不思議だと思っていると、この逃げた馬が同じような馬を何頭も連れて戻ってきた。たいそう珍しいことであるので、おじいさんと親しい者も祝いたい者も祝いを言う。しかし、またおじいさんは「うれしくない」と言って、このことをも驚く様子がない。こうして、この何頭もの馬を飼っていろいろなことに使っていたが、おじいさんの子が今現れた馬に乗って落ちて、右の腕をついて折ってしまいました。そのことを聞いた人は、また驚いておじいさんに問うがその様子を見てやはり「後悔していない」と言って、様子はいつもと変わらない。そうしているうちに、突然、戦争が始まって兵を集められた時、国中で兵士になりうる者が一人残らず戦争に出て皆死んでしまった。このおじいさんの子は、手が折れているという理由でその兵士の中からもれてしまったので、片手は折れているけれども命は落とすことなく無事だった。このおじいさんの態度は賢明な前例として言い伝えられている。中国のことであるけれども、少しばかりこのことを記した。

出典

古今著聞集(橘成季)の編著。鎌倉中期の説話集。王朝文化への憧れに満ちている。量は『今昔物語集』に次ぎ、形式的には最も整っている。

1 長能VS道済

(大阪女子大・京都教育大・神戸大・横浜国立大・関西大・大谷女子大・東京都立大)

〈古本説話集〉

今は昔、長能^{ながたう}、道済^{みちなり}といふ歌よみども、いみじう^①挑み交はして詠みけり。長能は、かげろふの日記したる人の兄人^{せうと}、伝はりたる歌よみ、道済、信明^{しんめい}といひし歌よみの孫にて、いみじく挑み交はしたるに、鷹狩の歌を二人詠みけるに、長能、

道済、

ぬれぬれもなほ狩りゆかむはしたかの上毛の雪をうち払ひつつ

と詠みて、おのおの「我がまさりたり」と論じつつ、四条大納言の許へ二人参りて、^B判せさせたまつるに、大納言のたまふ、「ともによきにとりて、あらはは、^C宿借るばかりは、いかで濡れむぞ。ここもとぞ劣りたる。歌柄はよし。道済がは、^Dさ言はれたり。末の世にも、集などにも入りなむ」とありければ、道済、舞ひ奏でて出でぬ。長能、物思ひ姿にて、出でにけり。さきざき何事も、長能は上手^{うはて}を打ちけるに、この度は本意^④なかりけりとぞ。

【問一】重要語句 二重傍線部①～④の、ここでの意味を答えなさい。

【問二】漢字の読み 「本意」の読みを、ひらがなで答えなさい。

【問三】口語訳するために 傍線部A～Eを訳すために、次の小問に答えなさい。

*交野のみの 皇室領の遊獵地。

*はしたか 鷹の一種。鷹狩に用いる。

*四条大納言 藤原公任。平安中期の歌人。博学多芸で、当代随一。歌論書『新撰髓脳』、歌謡集『和漢朗詠集』を覚えよう。³ お花ちゃん¹¹ マルチ人間¹にも出てくる。

*歌柄 歌の品格、風格。

実戦ゼミ

古今異義語に

注意しよう①

□あきらむ 明らかにする・心を楽しくする

▼「明らかなり」と同じ意味で「あきらめる」とは違う。
□あくがる 離れてさまよう・魅せられる・疎遠になる

▼本来いる場所から離れてさまよう意。「あくは」所、「がる」は「離る」。
□おこたる 病気がよくなる

□おこなふ 仏道修行をする・勤行する

□おどろく はっと気づく・目が覚める

▼寝ていて、はっと気づけば、「目が覚める」。

□おどろかす はっとさせる・目を覚まさせる

□ねんず 我慢する
▼「念ず」と書き、サ変動詞。

I <重要語句> C 「いかで」の、ここでの意味を答えなさい。

II <品詞分解・文法説明> B・Eを、それぞれ品詞分解し、文法的に説明しなさい。また、C 「む」・D 「が」を文法的に説明しなさい。

III <口語訳> I・IIをふまえて、A～Eを訳しなさい。

【問四】和歌 「あられ降る」の歌について、次の小問に答えなさい。

I <掛詞> 次のア～ウに、適語を入れなさい。

「みの」は「御野」と「ア」、「かりころも」は「イ」と「ウ」の掛詞。

II <ぬ> の識別 <ぬれぬ。>と「ぬれぬ宿かす人」の意味を、それぞれ答えなさい。

III <し> の識別 <人しなれば>の「し」について、文法的に説明しなさい。

【問五】内容把握 波線部は、どのような気持ちの表れか、五字以内で答えなさい。

【問六】内容把握 二重傍線部④について、どのようなことに対していつているのか、三十五字以内で答えなさい。

【問七】文学史 『蜻蛉日記』の説明として正しいものを、次の選択肢より選び、記号で答えなさい。

- ア 夫、藤原道綱との愛の苦悩が描かれている。
- イ 息子、兼家に対する愛情が描かれている。
- ウ わが国初の仮名日記文学である。
- エ 『源氏物語』をはじめ、平安女流文学に大きな影響を与えた。

1 長能VS道済

〈古本説話集〉

解答

問一 ①激しく ②やはり ③よい ④残念だ

問二 はい 問三 I どうして…か、いや…ない II Bセ(サ変動詞「す」の未然形)・させ(使役の助動詞「さす」の連用形)・たてまつる(四段動詞「たてまつる」の連体形・謙讓の補助動詞) E 入り(四段動詞「入る」の連用形)・な(完了「こは強意」の助動詞「ぬ」の未然形)・む(推量の助動詞「む」の終止形) C 推量の助動詞「む」の連体形 D 格助詞・準体格(体言「歌」の代用) III A 代々続いてる歌詠み B していたたくC 宿を借りるほどどうして濡れるだろうか、いや濡れないだろう D 道済の歌は E きつと入るだろう

問四 I ア 糞 イ 狩り衣 ウ 借り衣(イ・ウは順不同) II 「ぬれぬ」…濡れてしまった 「ぬれぬ宿かす人」…濡れないための宿を貸す人 III 強意の副助詞 問五 うれしき

問六 これまでは、長能が道済を上回っていたが、今回は歌で負けたということ。(三十四字) 問七 エ

解法のポイント

問一 ①いみじ：程度がはなはだしいこと。プラス・マイナス両面に使われる。連用形「いみじく(う)」の場合、「とても、非常に・激しく」などと訳すことが多い。②なほ…素直の「直」。直線を

「飲む・食ふ・着る・乗る」の意なら、尊敬語。「を・に・の・は・も・が・名詞」の上は連体形。E…「入る」には四段と下二段がある。しかし、「入り」は下二段にはないので、四段の連用形と知れよう。「なむ」は「なむ」の識別別冊4・5頁参照。あわせCの「む」…「む」は強意の助動詞+推量の助動詞別冊23頁参照。体言・連体形。Dの「が」…何が話題になっているかを考えれば容易。

III A…「信明といひし歌よみの孫」とある。 B…直訳すれば、「おさせ申し上げる」。

問四 I 掛詞は、縁語と重複して使われることが多い。このことを知っておくとよい。「あられ」降る「ぬれ」に注目できれば、「み」が雨具と判断できよう。鷹狩りの歌なのだから、「かりごろも」には「狩り衣」の意があり、「かす」に注目できれば「借り衣」の意があることもわかるだろう。よく使われる掛詞は覚えておこう。(実戦ゼミ)本冊63頁参照。

II 「ぬれぬ」…「ぬ」は終止形。よって、完了の助動詞。「ぬれぬ宿かす人」…「宿」(体言)の直前なので、連体形。よって、打消の助動詞「ず」。「ぬ」の識別別冊48頁参照。

III 「し」を除いても、支障がない。よって、強意の副助詞。「し」の識別別冊49頁参照。

問五 四条大納言の判「末の世にも、集などにも入りなむ」に注目。道済の歌は褒められているのだ。

問六 ここでの、本来の志とは何か。7行目「我がまさりたり」とある。自分の歌を優れていると思っているのだ。また、11行目の「さきさき何事も、長能は上手を打ちけるに、この度は」に着目してほしい。

問七 ア…夫は藤原兼家。 イ…息子は藤原道綱。 ウ…わが国

イメージしよう。すでにその直線上にある。つまり、以前と同様、というニュアンスがあるのだ。③よし…よし・よろし・わろし・あしはセットで押さえよう。「よし」は「良い」、「あし」は「悪い」。「よろし」は「悪くはない」、「わろし」は「良くない」④本意なし…本意(本来の志)が実現せず、不満であるの意。「なし」の語は(実戦ゼミ)本冊25・27・29・31・33頁参照。

問三 I いかで…疑問・反語・願望の意がある。ここでの意味は、直後の「ここともぞ劣りたる」から判断できよう。大納言の判定は、もうすでに決まっているのだ。

II B…「せ」は動詞として訳せるのでサ変動詞とわかる。「させ」は直後に尊敬語がないので使役。

使役の助動詞

「す」…四段・ナ変・ラ変の未然形につく。
「さす」…それ以外の未然形につく。
「しむ」…動詞・形容詞・形容動詞の未然形につく。

①使役(～させる)
②尊敬(～なさる・おくになる)

軍記物語の場合、受身の意になることもある。
例わが身手負ひ、家の子・郎等多く討たせ、馬の腹射させ、引き退く。(自分は負傷し、家臣は数多く討たれ、馬の腹を射られて引きさがる)

※直後に尊敬語がある場合、「尊敬」の可能性が高い。ただし、「使役」のこともあるので気をつけよう。直後に尊敬語がなければ、「使役」・「尊敬」ではない。

「たてまつる」は補助動詞なので、謙讓語とわかる。ただし、本動詞の場合、尊敬語の可能性もあるので気をつける必要がある。

初の仮名日記文学は『土佐日記』。【平安時代の日記文学】は別冊39頁参照。

通釈

今となつては昔のことだが、長能と道済という歌人達が、激しく張り合つて(歌を)詠んだ。長能は、『蜻蛉日記』を書いた人の弟で、(家柄は歌人として)代々続いている歌詠み(の家系)で、道済は信明といった歌人の孫であつて、激しく張り合つていたが、(あるとき)鷹狩りの歌を二人が詠んだ時に、長能は、

交野の御料地で鷹狩りをしていると、あられが降つてきて狩衣が濡れてしまった。この広い野には濡れない(ための)宿を貸す人もいないので。

道済は、
雪に濡れても濡れても、やはり鷹狩りを続けていこう。はし鷹の上毛に降りかかる雪を払い落としながら。

と詠んで、めいめい「自分の歌が優れている」と論じながら、四条大納言の所へ二人で参上して判定をしていただくときに、大納言がおっしゃるには、「どちらもよい歌だと思つたが、「あられ降る」の歌について言うと(あられでは、宿を借りるほどどうして濡れるだろうか、いや濡れないだろう。このところが劣っている。歌の品格はよい。道済の歌は、(雪に濡れても濡れても、やはり鷹狩りを続けていこう)そのように(もつともな表現で)詠まれている。後々の時代に、歌集などにもきつと入るだろう」という判定であつたので、道済は(うれしきで)小躍りしながら退出した。長能は、何か考へことをする姿で、退出した。これまでは何事においても、長能は(道済を)上回っていたのに、今回は残念だつたということだ。